

新体詩：文苑

著者	内田，夕闇，夕陽，芒村
雑誌名	龍南會雜誌
巻	103
ページ	30-36
発行年	1903-12-25
URL	http://hdl.handle.net/2298/5646

『われはシャロンの野の谷の花なり』『ソロモンの榮華の極みだに我れには及ばざりき』。

新体詩

夢の香

(わが故郷の詩友曉聲に與へたる)

○その一

内 田 夕 闇

ふる里遠くはなれ來て

迷ふは阿蘇のふもと原

何慰めの花もなく

迷ふは阿蘇のふもと原

笛聲^{ふえ}を得ざりし小羊の

力つかれてあゆみより

人になさげを乞ふ如く

かうべを垂る、暮の闇

あけぼのひとり目覺めては

森の木蔭に露おびて

羽風もかるき白鳩の

やさしき君を思ふかな

よべ夢に見し君が笛

いつひびくかと疑はれ

彩^{のそみ}ある雲の間をば

希望^{のそみ}に饑ゑて窺ふを

たちまち醒むる夢の香の

消えては白き闇の花

くづれて水に流れ去り

淡げにのみも止めざる

淡げにのみも止めねど

うれひに消ゆるものなれば

再び夢の野に入りて

入りては見つる君が影

はかなき夢の面影を

のぞみの櫓、日の園生

たゞ慰藉の花ぞとて

戀ひまつはりし我や何

あゝ十絃の琴鳴りて

流韻雲にたゞよひつ

十二の門を築くごと

傾けつくす君が愛

わきてしたゝる森の蔭

そこに慰薬の甕となり

やみにかくると小き子を

誘うて高き匂ひかな

うれひは多き君なれど

弱きにろくぐ涙あり

はづかしや我いたづらに

不遇にむせぶ磯の浪

われに珊瑚の香もなくて

なさけの浪は高からず

ゆるさずや君天地に

君は『曉』、われは『闇』

夕ぐれ窓に憊りてだに

涙は頬をつたひつゝ

空の黙示もきく得ざる

はかなきわれをいかに見る

芭蕉のかげにたゞすみて

大空白く流れゆく

無聲の樂の河水を

君默想の材として

得てきと云ひし一曲の

しらべをわれに送らずや

そは美しき天樂に

さながら似たる『享樂篇』

あゝ君が聲なを遅き

あゝ君が影など淡き

遅き淡きをやむ我に

光ある詩送らずや

○うの二

逢はむの願あだならで

君が詩室の西の窓

芭蕉の影に立ちし時

迎へて清き君がるみ

青葉の匂ひすすしき

時しも消ゆる空だきの

名残の星を玉と見て

互の胸をうちひらき

語ればつきぬ白糸の

瀧の白ねりしづくとど

あるは華嚴の瀧の瀬の

虹を現する大壯語

されど再び別るべき

運命まごめにもれぬふたりなり

つらくも胸にせまりくる

憂愁の矢の音高く

何をのろひの星くづぞ

北天遠きはてにして

二つの影はながれたり

三つの影は碎けたり

やぶれやすがる芭蕉葉も

いまだ破れぬ影にして

消え去りやすき白露も

玉とほこれる草生にて

などて二人は東の間に

逢うてわかるとさだめぞや

永きうらみの糸すぢの

みだれみだると夜の風

互に立ちて取かはす

手と手にさはる芭蕉葉の

それよなさけのひと雫

落ちてひびきも立てざりき

やみに立ちます君が影

白衣しろいぬいのかげほのかにて

見かへる我は小羊の

のぞの星のくもりがち

よもぎの如く亂れては

露おきやすき我が髪や

別れてかくて我は今

再び阿蘇のふもと草

(――逢うて別れて又逢うて――)

里さとのひな歌いやしとて

すつるにたへぬ君ならば

我ならばいざもろ共に

星のめぐりを仰ぎ見む

あゝ『夕』より『曉』に

めぐりてやまぬ大白星うしろぼしを

わが名君が名つなぎたる

友情なまじりの玉とたゝへすや

この世に何のはねもなく

せまき詩室のまどにより

ただ即興の詩を書いて

はづかにゑめる我ながら

心霊うちに饑ゑざらば

足は闇路をふむとて

肉は荆棘にささるゝも

光明あふるゝ靈恣を見む

なさけの水のそこ久に

二人の胸を流れなば

天空ゆく驚は迅くとも

震怒の爪を磨ぎなむや

怯と呼ばれて恥ぢむより

男の子が魂をためし見て

不遇に泣きし愚かさを

呵々と笑はむ大空に

ゆく手はかすむ詩の領

若草野花咲きみちて

春の光は美しく

生命の河や清からむ

破 鐘 賦

夕

陽

とはに活きむのいのちぞと

春桃源のあさばらさ

秋關山のゆふまぐれ

不朽のひびきつたへけむ

げに常住の世なりせば

み空の星の万劫に

光りかくやくそれのごと

末世の花もながめん

老鐘一夜罪の子が

やせしかひなにそと撞きし

有情の胸のちらみにか

あはれもろくも碎けたり。

名もなき里の古寺に

ゑにしありてか千年の

春秋消えて人の世の

うつろふさまも見とめしか

つたなき宿世かこたずも
 かたむきかゝる鐘樓の
 檐端にそゞぐ夜半の雨
 さびしの音にひゝかすや。

若葉の春の色戀ひて
 はかなき夢やしたふらむ
 秋にやせゆく森の戸に
 小鳥かなしく鳴きおくれ

花なき里としりながら
 去なむ心のいたましく
 落葉の霜にしたひよる
 いづれ運命の網にして。

ナザレの野べの花に見て
 靈鷲の峯の月に見て
 あふぎて俯して天地の
 たふとき道をしたひつゝ

眞理の海にさまよひし
 高き聖のみをしへよ
 今混沌の人の子に
 いかなる聲やつたふらむ。

あゝ老鐘はくだけたり
 さはれ存りて人の世の
 罪のはだしにあはんより
 くだけて天の戸に入りし

破鐘の身こそ
 心やすけれ。

樂 比 音



芒

村

湧きとどろく新潮の
 ひゞきはたかき曙の
 み空を遠くながむとき
 にはかにおこる樂の音の
 かすかにさうくひゞきたり。

はのかに匂ふ夕空の
薔薇の色に、星影の

白銀のいろなぐるとき

かすかにひびく樂の音の
遠くはるかにひびきたり。

楊もけふるバビロンの

流れはしろき河のべに

世をかなしみし伶人が

遠きみ空をしたひつゝ

かなでいでたる樂の音か。

われどこやみの世に泣きて

まよひの夢にたへざれば

きよく、はるかに、底深く

かの樂の音の湧き出づる
御空のおちどなつかしき。

虹のかゞやき、おほそらの
聖き光もあふがすて

『市の虚榮』にくるひゆく
かの樂の音を、世の人の
まよへる耳はきかずとか。

いさごの原を迷ひては

渴きはてたる旅の子が

草みどりなるオースシの

きよき清水によるごどく

あゝ吾が「生命」樂の聲。

